連載コラム

みずき野とその周辺の植物と昆虫

第 20 回
木の実いろいろ（2）

本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫
（20）木の実いろいろ（2）

秋から初冬にかけての木の実は落ちたり、小鳥に食べられたりして、少なくなりましたが、厳冬期を迎えても、まだナンテンの赤い実の群がりを見ることができます。また、キヅタのように、これから成熟する実もあります。

今回は、秋から初冬に見られた果実について、前回書き残したものも多いので、主としてそれらについて、述べることにします。

（1）ナンテン

ナンテンは冬季に群がってつく真っ赤な実が美しく、庭木として普通に使われる植物ですが、野生しているものもあります。古い時代に中国から渡ってきたとも云われ、小鳥が庭園などからついばんだ実があちこちに散らばって発芽し、帰化植物として定着しているものと思われます。

雪が降った朝、積もった銀白の雪に映えるナンテンの赤い実と緑鮮やかな葉は、ことさら美しいものです。また、雪のからだにナンテンの赤い目、緑の葉の耳をつけ、お盆に乗せた雪兎は、いかにも日本的な冬の風物です。

ナンテンは中国では南天竹といい、そこからナンテン（南天）という和名が生じました。日本では、ナンテンを「難を転じる」とかこつけ、縁起のよい植物としています。

ナンテンの実
11 月中旬
みずき野 5 丁目

(2) タチバナモドキ

ピラカンサとよばれる植物に３種類あります。タチバナモドキ、トキワサンザシ、カザンデマリです。販売されている苗は、３種の区別なく、一様にピラカンサの名で売られているようです。３種とも外来の植物で、タチバナモドキとカザンデマリは中国原産、トキワサンザシはヨーロッパ南部から西アジアの原産です。

ピラカンサの中では、真っ赤な実を密につけるトキワサンザシが最も鮮やかです。タチバナモドキやカザンデマリの実は橙赤色のものが多いようです。

実が鳥に運ばれて、野原で自生しているものもあります。それらのうち、みずき野周辺にはタチバナモドキがしばしば見られます。タチバナモドキは、他の２種と違って葉が細長く、葉の縁に鋸歯（葉のふちのぎざぎざ）がない（他の２種には鋸歯がある）ので容易に見分けがつきます。

タチバナモドキ　12 月下旬　上高井地区

(3) モチノキ

モチノキは日本、中国、台湾に原産する常緑高木で、雄株と雌株があります。初冬には雌の木に真っ赤な実が目立ちます。みずき野周辺では自生しているモチノキは見当たりませんが、植栽したと思われるものはよく見ます。

モチノキの実
12 月上旬
さくらの杜公園

モチノキは鑑賞用の園芸植物として利用されますが、樹皮から鳥黐（トリモチ）をとるためにも使われていました。鳥黐は非常に粘着性のある物質で、木の枝や竿の先に塗って、鳥を捕獲します。ただし、現在は一般に野鳥の捕獲が禁止されており、もちろん鳥黐で鳥をとることも厳禁です。

鳥黐を竿につけて、鳥を捕獲することは、日本に限らず、外国でも行われていました。鳥黐は英語でbirdlimeと云い、セイヨウヒイラギ（ホリー）の樹皮から取られていたようです。もち竿で鳥をとる人を「鳥刺し」と云いますが、モーツァルトのオペラ「魔笛」に登場する重要な脇役、パパゲーノはその「鳥刺し」です。最初のアリアは「私は鳥刺し（Der Vogelfänger bin ich ja）」。意志が弱く、享楽的、そのくせ純情なパパゲーノは、意志が強く厳しい試練に耐える主役、王子タミーノよりも、なんとなく親しみを感じます。コケティッシュな恋人パパゲーナとは愛すべきカップルです。

（4）アオツヅラフジ

アオツヅラフジは木本性のつる植物で、他の植物に巻きついて伸びます。茎の直径は太くても１センチ程度ですが、長く伸びて１０メートル以上にも成長します。北海道を除いて全国に普通の植物です。雄株と雌株があり、花は７月頃。秋には青い実が見られます。別名はカミエビ。

アオツヅラフジの実
9 月下旬
本町地区

万葉集に「つづら」とあるのは、アオツヅラフジのことらしい。

上野（かみつけ）の　安蘇（あそ）山　つづら野を広み
延（は）ひにしものを　あぜか絶えせむ
東歌（３４３４）

（上野の安蘇山のつづらは広い野原をいっぱいに延びているのだから、どうして絶えることがあろうか。　上野の国は今の群馬県。自分の恋心を這い延びるつづらに例えて、彼女への思いは絶えないことを伝えている。）

なお、アオツヅラフジや、関東以西の暖地に生えるツヅラフジはかつて「つづら」を編む材料として使われたとのことです。

(5) エビヅル

エビヅルは、本州、四国、九州に分布する木本性のつる植物で、雄株と雌株があります。ヤマブドウによく似た植物ですが、ヤマブドウは山地に生えるので、平地で見られませんが、エビヅルは山地にも平地にも生え、みずき野周辺にもよく見られます。写真は成熟途中の果実が写っていますが、黒く成熟した果実は食べられ、甘酸っぱい味がします。

エビヅルの実
9 月下旬
貝塚地区

(6) シロダモ

林のへり沿いの道を散歩していると、表が濃緑で、裏が白い葉をつけた高木が目につきます。北海道を除く日本全土や朝鮮や中国南部に見られるクスノキ科の植物です。ちなみに、名に「ダモ」がつくアオダモ（野球のバットの材料）やヤチダモはモクセイ科の植物で、シロダモとは縁がありません。

シロダモには雄株と雌株があって、初冬には雌株に黄色い花と赤い実が同時に見られます。雌花は雄株から花粉を受けた後、１年をかけて赤い実を作ります。たいていの植物は花が咲いて実が成るまで、長くとも半年ほどですが、それらと比べるとずいぶんのんびりした植物です。

シロダモの実と雌花
11 月上旬
本町地区

(7) キヅタ

薄暗い林の中に生えるつる性の木本で、北海道を除く日本全土や東アジア南部に分布しています。花は１０～１１月頃に咲き、翌春に実が成熟します。ツタの仲間と思われがちですが、ツタとは縁遠く、ツタはブドウ科の植物で、キヅタはウコギ科の植物です。

キヅタの実
3 月上旬
貝塚地区

英語のアイビー（ivy）もツタではなく、キヅタの仲間で、セイヨウキヅタと呼ばれています。斑入りの品種もあり、日本では観葉植物として栽培されています。

（8）エノキ、ムクノキ、ケヤキ

いずれもニレ科の落葉高木です。エノキは本州、四国、九州のほか、東アジア、東南アジアの温帯・亜熱帯・熱帯に、ムクノキとケヤキは本州、四国、九州や東アジア温帯～亜熱帯に分布しています。

エノキは４月に花が咲き、１本の木に雄花と雌花がつきます。果実は９月頃、赤から黄褐色に成熟します。食べてみるとほのかに甘いのですが、ジューシーではなく、かすかすした感じです。

エノキの花
4 月下旬
本町地区

エノキの実
9 月上旬
本町地区

しかし、小鳥たちには、エノキの実は大好物のようです。万葉集にはこんな歌があります。

わが門（かど）の　　榎（え）の実もり食む
百（もも）ち鳥　　千鳥は来れど　　君そ来まさぬ
作者不詳（３８７２）

（わが家の門の榎の実をついばみにたくさんの鳥は来るけれど、あなたはお出でにならない）

ムクノキは５月に花が咲き、実は晩秋に緑色から黒色に成熟します。食べてみると、ジューシーで甘く、エノキの実より味はまさっています。種子はやはり小鳥によって伝搬されます。

ムクノキの実
11 月下旬
本町地区

ケヤキは４～５月に花が咲き、雄花と雌花は１本の木につきます。実は晩秋に熟します。エノキやムクノキの実とは違い、淡褐色で、小さく、いびつなかたちをしています。実をつける枝は特殊な細い枝で、この小枝は１２月頃木から離れます。小枝についている数枚の葉が羽根の役目をし、風に吹かれて飛んで行きます。これがケヤキの実の伝搬の仕方です。

ケヤキの花
4 月下旬
もものき公園

ケヤキの実
12 月下旬
みずき野 7 丁目

ケヤキの実の拡大図

(9) 付記：ケヤキのこと

高木の中で、私はケヤキがとりわけ好きです。地面にしっかり根を張り、幹は空に向かってまっすぐに立ち、たくさんの枝を広げているすがたは、どんな高木よりも優れた美しさがあります。春の若葉、夏の深緑、秋の紅葉、冬の夕日を背景にした幹と枝ぶりのシルエット、四季それぞれに印象的なすがたを見せてくれます。

ケヤキは欅と書きます。欅という字の旁（つくり）は「擧」、すなわち「挙」の旧字体で、天に向かって梢を広げているケヤキのすがたを表現するにふさわしい字であると思います。

また、ケヤキという名は、広辞苑には「ケヤはケヤケシと同源。木理に基づく名か。キは木の意」とあります。私は木理だけの美しさだけではなく、その全体のすがたの美しさも含む名と思っています。別に「けや」の項を見ますと、「きわだって他と異なるさま」とあります。

ケヤキは古代からよく知られ、槻（つき）とよばれていました。万葉集にも何首か載せられています。

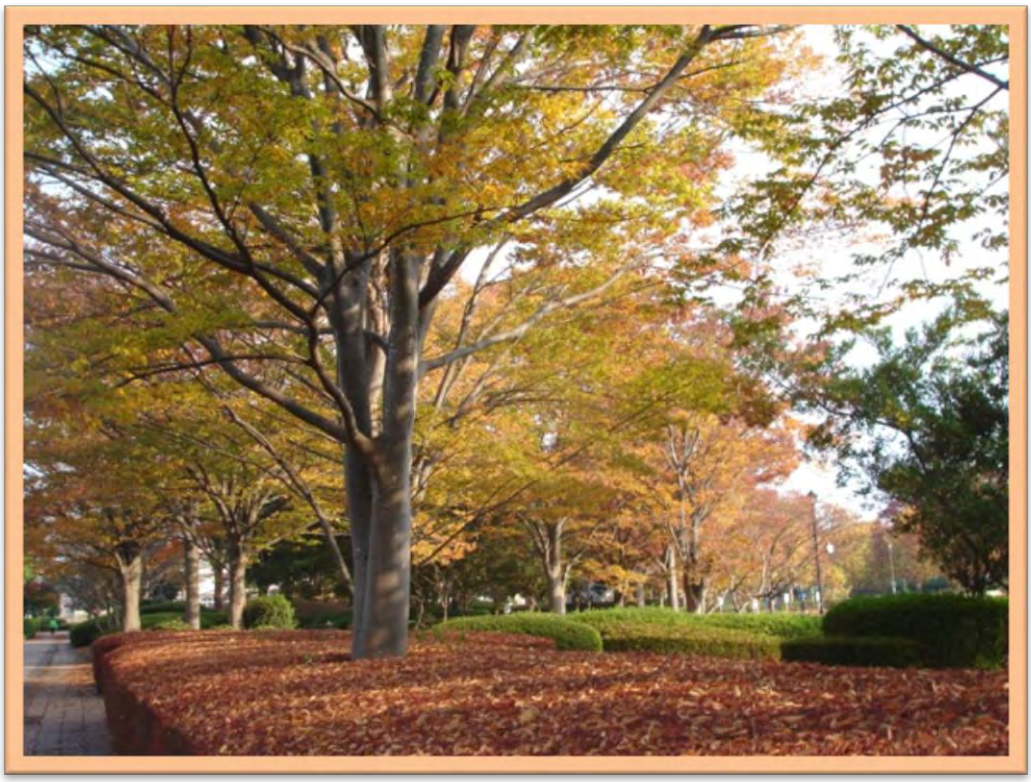
疾（と）く来ても　　見てましものを　　山城の
高の槻村　　散りにけるかも
高市黒人（２７７）

（もっと早く来ればよかったのに、山城の高の槻村の槻の葉はもう散ってしまった）

長谷（はつせ）の　　五百槻（ゆつき）が下（もと）に
吾（わ）が隠せる妻　　茜（あかね）さし
照れる月夜（つくよ）に　　人見てむかも
柿本人麻呂（２３５３　旋頭歌）

（長谷にある繁ったけやきの下に隠しておいた妻は、月夜に誰かに見つけられたかもしれない）

みずき野周辺には、ケヤキの高木が見られないのは残念ですが、５丁目、７丁目から６丁目に続くけやき並木の晩秋の紅葉の美しさは印象的です。
みずき野周辺とは云えませんが、松前台の大山公園には、巨木とまではいかないまでも、かなり大きなケヤキが何本かあり、守谷市の中ではケヤキの名所と云ってもいいのではないかと思います。



松前台大山公園のケヤキ　　11 月中旬

かつて、東京の郊外、武蔵野にはナラやクヌギの雑木林とともに、ケヤキの巨木が普通に生えていたのを思い出します。都会化した今、巨木は神社の境内などに残されたもの以外はほとんど見当たりません。

ちなみに、西脇順三郎の詩集「旅人かへらず」の一節を挙げておきましょう。

のぼりとから調布の方へ
多摩川をのぼる
十年の間学問をすてた
都の附近のむさしの野や
さがみの国を
欅（けやき）の樹をみながら歩いた
冬も楽しみであった
あの樹木のまがりや
枝ぶりの美しさにみとれて

2016 年 1 月
本吉總男